

## 第5章 神話

この『Myth & Renaissance』の世界の中核となる神話についての解説です。

### 5. 1 オーランの神話

#### 世界創造の神話

聖典「始まりの書」に記述された世界創造の神話です。

人の知を越えた はるか昔

世界は創り主によって無から作り出された

世界は創り主の住処に似せて作られた

創り主は自らの闇を打ち払い 真の光となった

真の光は光の神メガスとルカになり 残された闇からダールマータが生まれた

世界に残された無の切れ端からは ムーが生まれた

メガスとルカは光の神々を生みだし ダールマータとムーもまた闇の神々を生み出した

創り主より出し 光と闇の神々は互いに対立し争いとなった

争いの末 日は砕け 星となり 光が闇を滅ぼした

光が世界に平和をもたらした

神々の創りしもの それすなわち 神なり 神の子なり

しかれども その力 神々に遠く及ばず

人の世の 敬虔なる者

神々に寵愛され 大いなる奇跡を授かる

奇跡を授かりし者 司祭なり

－司祭見習いのための神学入門 I－

『始まりの書』第一章 世界創造

人間は最後に創造された。最後の創造なので、多くの神がそれに携わり、今までにたくさんのものを作っていたため、手慣れていた神々は最高の傑作として人を作ることができたとされている。

神々は人の眼に、太陽の輝きと透き通った空を宿し、その心は火のように熱く、その頭は水のように冷静沈着に作った。

－はじめての神学－

『始まりの書』第二章 人間創造

#### 神話におけるオーランの歴史

オーランの神話から歴史をまとめると、次のようになります。

##### ・世界の誕生

計り知れないほど昔、世界には何もなくて、創り主により無から世界が創造されました。創り主は神話においても、あまり語られておらず、どのような存在かはよくわかりません。そんな、神を超えた強大な存在により、世界は作り主の住処に似せて作られました。

##### ・神々の誕生

創り主は、純粋な存在ではなく、光と闇が入り混じった存在でした。そこで、自らの体を純粋な光の部分と、純粋な闇の部分に分け、光の部分からはメガスとルカ、闇の部分からは、ダールマータが生まれました。また、このとき、世界にわずかに残された無の切れ端からは、ムーが生まれました。

メガス、ルカは光の神フォトス、水の女神アーニユウェル、火の神フーなどを生み出しました。ダー

ルマータ、ムーは破壊の神デイス、終末の女神フィニスなどを生み出しました。

こうして世界には、十六の光の神々と十四の闇の神々が生まれました。

#### ・人間創造

創り主が作った世界は未完成でした。未だ大地は固まらず、生き物も存在しない世界でした。光の神々、闇の神々が生まれたのちに、神々が世界を改めて作り直しました。世界に秩序と光を与え、大地を固め、海を潤し、草木を創造し、最後に人間を創りました。

神々は人の眼に、太陽の輝きと透き通った空を宿し、その心は火のように熱く、その頭は水のように冷静沈着に作りあげました。

世界は光の神々と闇の神々とで共同で作られていたのですが、最後の人間だけは光の神々だけから作られたと言われています。

#### ・無塵戦争

作り上げた世界の覇権をめぐり、光の神々と闇の神々の対立が起こります。この対立は些細なことから起こりましたが、やがて多くの神々を巻き込み、神々の戦争に発展しました。

神々の戦争は熾烈を極め、戦ったあとには塵も残らなかったと言われています。このため、この戦争は無塵戦争と呼ばれるようになりました。

無塵戦争には古代の人間も関わり、光の神につく人間とものと、闇の神につく人間とに分かれました。

どちらの陣営についた人間も、その知恵と手を活躍させ、たくさんの神具を生み出し、神々に提供しました。

無塵戦争は、神の数が多い光の神々が優勢でした。しかし、知恵の神ダンブルドゥアが光の神々を裏切り、形勢が逆転します。この裏切りにより、第二の太陽であった、セルフアが砕け、星が生まれました。

セルフアの犠牲により、光の神が奮起し、光の神々が、闇の神々を打ち破りました。

最後に、闇の神々は、光の神々に味方した人間に闇の奇跡をかけて、逃げ去ります。こうして神々の

無塵戦争が終結します。

闇の神々が逃げ去った後も、闇の神々を信仰していた人間たちが最後まで抵抗しましたが、光の神々を信仰する人間に滅ぼされました。こうして、人間の世界でも無塵戦争が終結し、世界は光に満たされました。

#### ・薄明かりの神々の誕生

無塵戦争の功績により、十五の人間が光の神々から、神と認められました。こうして十五の人間は十五の薄明かりの神々となりました。

#### ・闇の神々の奇跡

無塵戦争で闇の神々を退けましたが、世界には逃げ去った闇の神々が現れ、人々の閑活を脅かしていました。

無塵戦争でかけた闇の神々の奇跡とは、人間の中に闇の神々が入りこみ、人の心を操ってしまうという奇跡でした。

奇跡により、人間は自然に心を闇にとらわれてしまい、光の神々の教えを破ってしまうようになってしまいました。こうして、人間と心の闇との永遠に続く戦いが始まります。

#### ・人間の時代

一方の光の神々も無塵戦争で力の大部分を失いました。時々現れる闇の神々から世界を守るために、光の神々は、その一部を世界と一体化させました。このとき、力のある神々は月や太陽、星の形でその一部をとどめましたが、ほとんどの神は人間に分かる形で姿を残しませんでした。

光の神々の神託により、人間ダリウス・メガゼイアが初代教皇となりオーランを統治することになりました。

そして、現在はアーリア・フェルナンデス教皇が第 880 代目の教皇としてオーランを治めています

## 5. 2 オーランの神々

オーランでは熱狂的に神が信仰されています。神が存在しないと思っている人はごくわずかです。オーランで主に信仰されているのは、聖典「始まりの書」に登場する「十五の光の祭神」、「十五の薄明かりの祭神」です。これらの祭神から、自分にあう祭神を1つ以上信仰するのが一般的です。「光の祭神」や「薄明かりの祭神」であればどの祭神でも信仰は等しく認められます。これ以外に、信仰を禁じられている「十五の闇の祭神」、そして科学の祭神である魔神が存在します。

信仰されている祭神は大きく分けて2つのグループに分かれます。

### 「古き祭神」

オーランに古来より伝えられている物語とともに、よく知られている祭神です。オーランの人々の生活に浸透しており、ほとんどの事象が人間にははかり知ることのできない祭神の意思であると解釈されています。古き祭神はさらに3つのグループに分類されます。

#### ・光の祭神

オーランで最も多くの人に信仰されている神々です。主神メガス、ルカを中心とした、世界を創造したとされる十五の祭神が名を連ねています。これらの祭神は世界の創造神でありながら、神話から世界そのものの一部でもあるとも考えられています。

それゆえ、世界の一部である人間は、神の一部であり、力の弱い神であるとも考えられています。同時に人間以外のすべてのものも神の一部であり、そこには貴賤はないとされています。(死は神の一部が形を変えただけだと解釈されています。)

教義は『信じる神の教えを守り、善き行いを繰り返し、厳しい試練を全うすること』です。

世界で人々に強大な奇跡の恩恵を与えるのは、光の祭神です。それゆえ、光の神々は人間を超越した絶対上位の存在です。光の祭神の教えを守り、祭神の御心に沿う善行を行うことで、神の恩寵により闇の祭神から身を守ることができると説いています。

このため、『世界や人間の心に潜む闇を認め、光で心を満たすことで、常にその闇と戦うこと』も掲

げています。

本来であれば、光の神の教義は、後述の新しい神を直接、否定するものではありません。あくまで、光の神を信仰する者が、新しい神を否定しているだけであり、光の神自体が否定しているのではないのです。

#### ・薄明かりの祭神

無塵戦争で功績を認められ、光の祭神のより神になった十五の下位神です。薄明かりの祭神もまた、オーランの人々に強力な奇跡の力を与えます。もともとは、古代のオーランに実在した人間です。光の祭神とはやや違った特色を持っています。

神話の経緯から、神格の位置づけは光の祭神に劣ります。しかし、オーランでは信仰対象として光の祭神と同等に認められており、光の祭神に勝らずとも劣らずというぐらいいろんな人々の信仰の対象になっています。

この祭神の教義は『祭神の教えを手本として、自己の到達目標を掲げ、祭神と同列の存在になること』です。光の祭神と違い、祭神を絶対上位の存在とせず、人間の到達目標として薄明かりの神々を掲げています。

また光の祭神の信仰者と比較して、より多くの祭神を信仰する傾向があります。これは、たくさんの祭神を信仰することで、より自分の理想に近い到達目標が模索できるという考えからです。

『光とも闇ともわからないから明るさが理想的である。なぜなら、光もなければ闇もないからだ。』と極端かつ挑戦的に語ることもしばしばあります。光と闇の間で中道的なスタンスを推奨としているようにも考えられます。

このような、光の祭神を信仰する者からすると過激とも感じられるような信仰が認められているのは、薄明かりの神々のことが神話の記述にあるためです。仮に、神話という後ろ盾がなければ、異端視される可能性もあり、一部の光の祭神の信仰者の中には、薄明かりの神々の正当性を否定している者もいます。

#### ・闇の祭神

オーランでは、邪悪とされている祭神です。闇の祭神を信仰するものは、光や薄明かりの祭神を信仰

するものから、邪教徒とみなされます。

創り主が真の光となった際に、創り主が打ち払った闇の残りから生まれました。世界創造で光の祭神と対立し、無塵戦争に敗北し、世界を追われました。逃げ去る前に、人間の心から闇が生まれ出るような闇の奇跡をかけました。以来、人間は心の闇に悩まされ続けることとなります。

闇の祭神たちは、神話的経緯から、今の世界の秩序を憎み、すべてを破壊し、無に帰することを望んでいます。それゆえ、光の祭神を信仰する者と対立しています。

この祭神の教義は『自分の心のうちに湧き出る欲望に自分の身をゆだねる』ことです。それはすなわち、闇に耳を傾け、闇に心を奪われることです。

熱心な信仰者はごく稀にしかいません。中には望んで信仰する者もありますが、闇の奇跡によって一時的に心を闇にとらわれている者がほとんどです。

オーランの世界では邪教ですが、神学者の中には、闇をつかさどると言われるようになったと言う異説を唱える者もごくわずかにいます。

## 「新しき祭神」

古き祭神とは違い、世界の現象の背後に潜む普遍的な真理を導き出そうとした結果、生まれた科学的思考法です。「新しき祭神」の「奇跡」により生み出された理論は「科学」と呼ばれています。

世界を理知的に観察、分析することによってのみ、真理に到達できるとしており、古き祭神の教えと異なります。既存の倫理観すら、新しき祭神を信仰する人々にとっては、非理知的（＝科学で説明できない）で価値のないことに当たります。彼らにとっては倫理など、非理論的なものは科学の発展を妨げるものでしかありません。

このため、新しき祭神を信仰する人々は、非倫理的な行動をとることがしばしばあり（場合によっては好んで）、これが古き祭神を信仰する人々との対立を生みます。

この神々の教義を直接は与えませんが、この神々の信奉者は『理論によって世界の真理を追究すること』を目標として掲げています。新しき祭神の信仰者は自らを「科学者」と呼びます。神殿勢力からは「魔神教徒」、あるいは新しき祭神を神と認めず「神の存在を否定する者」と呼ばれ異端者とみなされています。

## 奇跡

信仰する神の寵愛を受けることで、神の力を借り、人間の力を超えた現象を引き起こすことができます。この現象を奇跡と呼びます。

奇跡は次のように解釈されています。『奇跡』とは神に認められたもののみが起こすことのできる超常現象であり、（光の神々の寵愛を受けた）善き司祭が善き力を、（闇の神々の寵愛を受けた）悪しき司祭が悪しき力を行使するとされています。このため、よい奇跡を操ることができる人間は、神の寵愛を受けた人間として周りから、尊敬のまなざしで迎え入れられます。

強力な奇跡を使うことができるキャラクターは、司祭の地位につくことがほとんどです。

## 5. 3 祭神の解説

### 光の祭神

#### 【メガス】

オーランをルカとともに創造した神です。メガスとルカは、未完成の世界に秩序と変化を与え、世界と人間を創造したとされています。

メガスはそもそも、完全な光の神ではなかったのですが、世界を創造したときに、自身の闇を自切り離し、完全な光の神になりました。

このくだりは、一般的には自分の心の中にある闇を見つめ、決別を行うことで、真の意味で心を光で満たすことができるという、解釈になっています。

メガスが司るのは運命と秩序です。つまり、メガスは将来に起こりうることをすべて知ることができます。人間が知ることすらできない未来を知り、それを人間に伝えるのが、メガスの寵愛です。このため、将来の未知に対して恐怖を抱く人々から厚い信仰を得ています。

メガスは無塵戦争の後、自分の化身として常満月（とこみつぎ）フィルナを創造しました。フィルナは決して欠けることのないその姿で、オーランの秩序を見守っているとされています。

メガスが人の姿で描かれる場合は、厳格な面持ちの成人、特に中年から壮年の男性として描かれるこ

とが多いです。また、背景にフィルナも描かれることがしばしばあります。

## 【ルカ】

オーランをメガスとともに創造した女神です。ルカが司るのは、希望、幸運、気まぐれです。移満月（移満月）セレナがルカの化身です。

ルカはメガスとは異なり、与えられた運命を捻じ曲げる力を持ちます。しかし、それは行く先に困難があるときにのみで、いたずらに運命を捻じ曲げるわけではありません。困難を直面した人間を助けるために運命を好転させるのです。このため、過酷な人生を歩んでいる人間が信仰することが多いです。

ルカが人の姿で描かれる場合は、女性として描かれます。年齢や見た目、服装は一定しておらず、背景には欠けたセレナが描かれることが多いです。

## 【フォトス】

メガス、ルカが生み出した、光を司る神です。フォトスとオルニスとは双子の神です。フォトスが司るのは、光、誠実、親愛、公正です。光と公正さを闇に寄せ付けないというのがフォトスの教えです。

フォトスはメガスほどの強大な力を持ちませんが、人間について驚くほど知っている神であると言われています。それゆえ、人が何を考えているかを知ることができ、フォトスの前で嘘をつくことは不可能だとされています。

オーランでは「お天道様の前で嘘がつけるか？」といって相手の嘘を問い詰めることがあります。これはフォトスの嘘を見抜く力が由来です。

フォトスの化身は、太陽です。また、生活に身近なところでは、フォトスはお金の単位として用いられています。

フォトスが人の姿として描かれる場合は、さっぱりとした好青年として描かれることが多いです。

## 【オルニス】

オルニスはフォトスの弟にあたる神です。オルニスが司るのは青空、解放、流転、変化です。オルニスの化身は、青空や風です。

旅人に広く信仰されています。

オルニスが人の姿で描かれる場合は、フォトスと

同様に好青年として描かれますが、同時に必ず鳥が描かれます。

## 【フー】

フーはフォトス、オルニスの次に生まれた、炎を司る神です。司るのは、炎、熱意、根気です。

負けず嫌いであることも有名で、薄明かりの祭神である勝負の神アデュエルに勝負を挑まれ根気比べをした逸話も残されています。

フーの化身は炎です。フーが人の姿で描かれる場合は、半裸の筋肉質な男性で、多くの場合が炎をかたどった独特な炎髪とヒゲを生やしています。また、背景には大きな炎が描かれることもしばしばあります。

## 【アーニュウェル】

アーニュウェルはフーの妹にあたる、水を司る神です。司るのは、水、知性、清浄です。

無塵戦争において、炎の神フーがセルフアの仇討に単身ダンブルドゥアのもとに乗り込もうとしました。このとき、フーは他の神の説得は一切聞かなかったのですが、アーニュウェルがフーの炎髪に冷や水をかけて、フーはやっと冷静になりました。普段は知的なアーニュウェルが、物理的手段に訴えたことでフーが驚いたためと言われています。

アーニュウェルの化身は、水や川です。アーニュウェルが人の姿で描かれる場合は、透き通った衣を身にまとった、地に着くような長い髪の若い女性として描かれることが多いです。

## 【エルデ】

エルデは大地を司る女神です。司るのは大地、慈愛、安定です。エルデの化身は、大地や動植物です。

未完成の世界のドロドロの大地を、1カ月かけて足で踏み固めて、今の大地を作り上げたと言われていました。大地を作り上げたあとには、動物や植物も作りしました。

エルデが人の姿で描かれる場合は、中年ぐらいの女性として描かれることが多いです。ただ、滅多に人の姿で描かれることはなく、ほとんどは動植物として描かれます。

## 【セルフア】

セルフアは星空を司る女神です。司るのは星空、

献身、自己犠牲です。

セルフア以外の神は信仰によって命を落とすことを認めていませんが、セルフアだけは殉教を認めています。

セルフアはもともと夜間にあがる太陽を司る神でした。無塵戦争で、ダンブルドゥアの裏切りで命を狙われた恋人である夜空の神ヌクトスをかばいました。

そのとき、ダンブルドゥアの放った火矢に当たり、その体を離散させてしまいました。離散した体は星となり、それ以来、夜空に浮かぶこととなりました。

セルフアの化身は、星空です。セルフアが人の姿で描かれる場合は、繊細な女性として描かれることが多く、必ず星も描かれます。

## 【ヌクトス】

ヌクトスは夜空を司る神です。司るのは夜空、反省、弔いです。

ヌクトスはもともとオルニスと同じ青空の神でした。夜間はセルフアとともに空にアがっていたのですが、無塵戦争でダンブルドゥアの裏切りにあいいます。そこをセルフアにかばわれて、一命をとりとめます。

しかし、セルフアを失った衝撃によって、ヌクトスは二度と青空のように明るく輝くことはなくなりました。

オーランの弔いは夜間に行われ、ヌクトスの司祭が執り行いますが、それはこのような神話のためです。

ヌクトスの化身は、夜空です。ヌクトスが人の姿で描かれる場合は、年齢は様々で、難しい表情をした男性として描かれることが多いです。

## 【クリエ】

クリエは暁を司る女神です。司るのは暁、博愛です。クリエは人に目覚めを与えられています。

暁の女神クリエは黄昏の女神エスペラスの姉です。

クリエの化身は、暁です。クリエが人の姿で描かれる場合は、妙齡の女性として描かれることが多いです。

## 【エスペラス】

エスペラスは黄昏を司る女神です。司るのは黄昏、躊躇です。

黄昏の女神エスペラスは暁の女神クリエの妹です。クリエとは対照的に人に安らぎを与えられています。

エスペラスの化身は、黄昏です。エスペラスが人の姿で描かれる場合は、妙齡の女性として描かれることが多いです。

## 【リンリン】

リンリンは春を司る女神です。司るのは春、無邪気さ、好奇心です。

リンリンの化身は、春とされており、よく使われる象徴は桜の花です。

リンリンは他の四季の女神と体を共有しています。季節が進み、女神の体が成長することで、女神が入れ替わり、四季が進むのです。リンリンは鈴を持った、7〜8歳ぐらいの少女として描かれます。

## 【モーウェ】

モーウェは夏を司る女神です。司るのは夏、熱狂です。

モーウェの化身は、夏とされており、よく使われる象徴はひまわりです。

モーウェが人の姿で描かれる場合は、12〜14歳ぐらいの女性として描かれ、ひまわりの花が同時に描かれます。

## 【フルーレ】

フルーレは秋を司る女神です。司るのは秋、やすらぎ、おちつきです。

フルーレの化身は、秋とされており、よく使われる象徴は紅葉、すすきです。

フルーレが人の姿で描かれる場合は、20歳前後の女性として描かれ、紅葉、すすきが同時に描かれます。

## 【キューティア】

キューティアは冬を司る女神です。司るのは冬、きびしさです。

キューティアの化身は、冬とされており、よく使われる象徴は水仙です。冬になりキューティアになった四季の女神は、春を迎えると、体が急速に縮み、再びリンリンの姿に戻ります。

キューティアが人の姿で描かれる場合は、30歳前後の女性として描かれることが多く、常に水仙と同時に描かれます。

## 薄明かりの祭神

### 【アデュエル】

アデュエルは勝負を司る神です。司るのは勝負、誇りです。

アデュエルはもともと、神格の低い光の祭神でした。あるとき、火の神フーが「私に燃やせないものはこの世界にはない」といっていたのを聞いて、「じゃあ、俺の心を燃やしてみろ」と勝負を挑みました。

フーは100の昼と100の夜、火を絶やすことなくアデュエルの心を燃やし続けました。そして、フーはアデュエルの心を見事燃やし、アデュエルは勝負の負けを潔く認めたというエピソードがあります。

アデュエルが人の姿で描かれる場合は、なまずひげを生やした、若めの紳士として描かれます。

### 【エレウセピア】

エレウセピアは自由を司る神です。司るのは自由、期待、望みです。

エレウセピアが人の姿で描かれる場合は、若い男性として描かれることが多いです。

### 【エオローテ】

エオローテは祭りを司る神です。司るのは祭り、楽しさ、笑いです。

しかし、もともとは神の祭りを取り仕切る役割を与えられた下位神でした。そのため、元来は礼儀作法をつかさどる神だったのですが、現在では祭りの部分だけが取り上げられることが多くなっています。

エオローテが人の姿で描かれる場合は、片手にパイを持ち、派手な衣装、奇抜な帽子をかぶった中年の男性として描かれることが多いです。

### 【メティア】

メティアは薬を司る女神です。司るのは薬、酒です。

無塵戦争の際に、メティアが作り出した秘薬によって多くの人々が命を救われました。この功績により、薄明かりの神となりました。

メティアの作りだした秘薬は非常に効果が高く、服用してまもなく、傷がふさがり、病が癒されたと言われています。また、その調合方法は、今なおオーランのどこかに眠っているとされ、これを求める者もたくさんいます。

メティアが人の姿で描かれる場合は、高齢の女性として描かれることが多いです。

### 【ソフィア】

ソフィアは恋を司る女神です。司るのは恋、勇気、知恵です。

ソフィアは、非常に知的で研究熱心な女性だったそうです。無塵戦争において、その知恵が大いに役立ち、その功績を認められて、薄明かりの神になりました。

あるとき、ソフィアが想いを抱いていた英雄アンドレイアが、闇の信仰者に命を狙われそうになったときに、弓を射てアンドレイアの命を助けたと言われています。

物語の神ミュウトの記録によると、ソフィアがみごとに射止めたのは闇の信仰者だけでなく、英雄アンドレイアの心も射止めたそうです。

ソフィアの成功談を聞きつけ、多くの乙女が恋のおまじないとして矢に願掛けをするようになったそうです。

ソフィアが人の姿で描かれる場合は、頬を染めた年頃の女性として描かれることが多いです。

### 【メロキュリア】

メロキュリアは歌を司る女神です。司るのは歌、愛、美です。

メロキュリアは人間の歌い手でした。容姿も美し

く、楽器と演奏しながら美しい声で歌ったと言われている。その歌声が多くの戦士を励ましたと言われている。

メロキュリアが人の姿で描かれる場合は、楽器を持った若い女性として描かれることが多いです。

## 【ミュウト】

ミュウトは物語を司る神です。司るのは物語、知識です。

ミュウトは物覚えがよく、神から多くの話を聞き、それを人間に伝えたと言われています。現在、残っている神話のほとんどはミュウトによって書かれたものです。

ミュウトは無塵戦争においてたくさんの記録を残しました。この功績を認められ、薄明かりの神となりました。

ミュウトが人の姿で描かれる場合は、長いひげを蓄えた、高齢の男性として描かれることが多いです。

## 【アーティス】

アーティスは技術を司る神です。司るのは技術、道具、芸術です。

アーティスは多くの職人に信仰されています。また、測量技術や単位を司るのもアーティスです。

アーティスは無塵戦争において、最も多くの神具を作成し、その功績を認められて薄明かりの神となりました。

アーティスが人の姿で描かれる場合は、さまざまな職人として描かれます。

## 【アンドレイア】

アンドレイアは戦を司る神です。司るのは戦、裁き、勇敢、大儀です。

無塵戦争の際に、最も多くの闇の信仰者を倒し、人間の身でありながら、闇の神に立ち向かったと伝えられています。その雄姿は、ともに戦う人間のみなならず、神を奮い立たせたとも言われています。この功績を認められ、薄明かりの神となりました。

アンドレイアが人の姿で描かれる場合は、鎧に身を包み、盾と剣を手に持った、精悍な中年の男性として描かれることが多いです。

## 【ソラ】

ソラは夢を司る女神です。司るのは夢、記憶、思い出です。

ソラが人の姿で描かれる場合は、年齢不詳の女性として描かれることが多いです。

## 【スピリア】

スピリアは息吹を司る女神です。司るのは息吹、活力、誕生です。

スピリアが人の姿で描かれる場合は、20代前半のエネルギー溢れる女性として描かれることが多いです。

## 【エディフィム】

エディフィムは住居を司る神です。司るのは住居、家庭、群集です。宿においてよく信仰されています。

無塵戦争において、シータとともに戦士たちの安全な休息所と食事を提供し、ポネロスの奇跡による病で苦しんでいる戦士を懸命に看病した功績を認められ、薄明かりの神となりました。

エディフィムが人の姿で描かれる場合は、中年の男性として描かれることが多いです。

## 【シータ】

シータは食事を司る女神です。司るのは食事、安息です。食事を提供するような酒場などでよく信仰されています。

無塵戦争において、エディフィムとともに戦士たちの安全な休息所と食事を提供し、ポネロスの奇跡による病で苦しんでいる戦士を懸命に看病した功績を認められ、薄明かりの神となりました。

シータが人の姿で描かれる場合は、中年の恰幅のよい女性として描かれることが多いです。

## 【コロナ】

コロナは衣を司る女神です。司るのは衣服、高貴、豊かさです。

もともとは神の衣服を作る服の職人でした。無塵戦争がはじまり、衣服だけでなく優れた軽装鎧を数多く残しました。その功績を認められ、薄明かりの神となりました。

コロナが人の姿で描かれる場合は、中年の女性として描かれることが多いです。

## 【オードス】

オードスは道を司る神です。司るのは道、交流、過程です。

オードスは方向感覚に優れ、いかなる場所でも迷うことがなかったと言われています。また、敵に見つからずに目的地に着くための技術にも長けていたようです。それゆえ、無塵戦争では、道案内を務めることが多く、その功績を認められ、薄明かりの神となりました。

オードスが人の姿で描かれる場合は、高齢の男性として描かれることが多いです。

## 闇の神々

### 【ディス】

ディスは破壊を司る神です。司るのは破壊、殺戮です。

創り主によって作られた未完成の世界は、誤った秩序によって作られていました。もともとは、その誤った秩序や世界を壊すために生み出された神です。

無塵戦争において、光の神に敗北してからは、光の神々の作りだした秩序やその信者を、世界に不要なものとなし、破壊すること目指しています。

ディスが人の姿で描かれる場合は、目が血走った若い男性として描かれることが多いです。

### 【アトクシア】

アトクシアは絶望を司る女神です。司るのは不安、恐怖、臆病です。

アトクシアが人の姿で描かれる場合は、死者の心臓を手を持った、妙齡の女性として描かれることが多いです。この心臓は、無塵戦争で命を落としたアトクシアの夫の心臓であるといわれています。

### 【フォボス】

フォボスは恐怖を司る神です。司るのは恐怖、不安、臆病です。

フォボスは恐ろしい姿をしており、無塵戦争では、その姿を見た人間は立ちすくみ動くことができない

いと言われていました。あまりに恐ろしい姿故に、神でも足をとどめたと言われています。

そのフォボスに単身で立ち向かっていったのが、人間のアンドレイアでした。アンドレイアの雄姿に勇気づけられた大勢の人間がフォボスに立ち向かい、フォボスは敗れ去りました。

フォボスが人の姿で描かれる場合は、性別、年齢不詳の不気味な男性として描かれることが多いです。

### 【ダンブルドゥア】

ダンブルドゥアは欺きを司る神です。司るのは欺き、狡猾、卑怯です。

ダンブルドゥアはもともと下位の光の祭神でした。無塵戦争のとき、光の祭神を裏切り、戦闘中にヌクトスを襲いました。これをかばったセルフアが犠牲となり、ヌクトスは光を失いました。

ダンブルドゥアが人の姿で描かれる場合は、高齢でひげの長い男性として描かれることが多いです。

### 【オグリソミア】

オグリソミアは怒りを司る女神です。司るのは、怒り、衝動です。

もともとは、ディスと同様に不完全な大地を溶かし、山や台地をつくるために生み出された神でした。

無塵戦争では、その力を利用し、大地に多くの火山を創り、溶岩を大量に吹き流し、噴煙をまき散らし、人間の住処を焼き尽くしたそうです。

オグリソミアが人の姿で描かれる場合は、若い女性として描かれることが多いです。

### 【ブール】

ブールは憎悪を司る神です。司るのは憎悪、嫉妬、嫌悪です。

ブールが人の姿で描かれる場合は、憎悪に顔をゆがめた男性として描かれることが多いです。

### 【パシュール】

パシュールは退廃を司る女神です。司るのは退廃、愛欲、欲情です。

パシュールは非常に妖艶な女神だったようです。

その妖艶な体を戦場でさらすことで、戦士たちの気を引きつけたそうです。パシュールのこの作戦により、多くの戦士が犠牲になったようです。

また、戦場でなくても、光の神々の陣営に入り込み、同じ手口で機密情報を奪取していたようです。

パシュールが人の姿で描かれる場合は、全裸に近い服を身につけた、成熟した女性として描かれることが多いです。

## 【ヴィーシャ】

ヴィーシャは不徳を司る神です。司るのは不徳、残虐、貪欲です。ヴィーシャは追いはぎや盗賊に信仰されています。

ヴィーシャは非常に手癖の悪い神で、仲間である闇の神々の神具をよく盗んでいました。現在、凄腕のスリのことをヴィーシャの右腕と言うのはこの故事にちなんでのことです。

また、ヴィーシャは闇の神々の中でもとりわけ、残虐な殺し方を好む神でした。無塵戦争では、倒した戦士たちの死体を戦場にさらし、自分の力を誇示していました。

しかし、それが仇になり、戦場で死体を並べているときにフォトスの軍勢に襲撃され、敗北しています。

ヴィーシャが人の姿で描かれる場合は、血塗られた武器を手にした若い男性として描かれることが多いです。

## 【ダールマータ】

ダールマータは闇を司る女神です。司るのは闇、墮落、孤独です。

世界が創造された際に、創り主の闇からできた最も古い部類の神です。ダールマータは闇の神々の中では最も知られており、信仰者の多い神です。

影はダールマータの化身であると言われていました。人の背後にできるような普通の陰も、ダールマータの化身ですが、ほとんどの影は力を持っていません。しかし、中にはダールマータの奇跡で作られた力の強い影があり、影に襲われることもあるようです。

ダールマータは影を通じて、光の神々やその信仰者を監視しているそうです。無塵戦争後ほとんどの闇の神々は姿を消しましたが、ダールマータは今な

お、人々の生活を大っぴらに監視している珍しい闇の神です。

ダールマータが人の姿で描かれる場合は、中年の女性として描かれることが多いです。

## 【スニーフ】

スニーフは復讐司る神です。司るのは復讐、報復です。

スニーフは毒を扱うのに長けた神だと言われていました。無塵戦争のときも、スニーフの作った毒をぬった武器により多くの人間が命を落としました。

また、スニーフが作った神殺しの毒矢をダンブルドゥアがヌクトスに放ち、かばったセルフアが破壊されました。

スニーフが人の姿で描かれる場合は、暗器や短剣を手にした若い男性として描かれることが多いです。

## 【ポネロス】

ポネロスは病を司る神です。司るのは病、不浄、苦しみ、蝕みです。人間が病気になるのはポネロスに奇跡を使われたからだと言われていました。

ポネロスの病は、無塵戦争の時、光の神々を大いに悩ませました。ポネロスの病は強力で、ポネロスの奇跡を得た者の近くにいるだけで、病気になりました。戦士たちが次々に病気になり、まともに戦えませんでした。

ポネロスが人の姿で描かれる場合は、八エがたかり、黒色の肌からは膿が流れ出している男性として描かれることが多いです。

## 【ブローワー】

ブローワーは混沌を司る女神です。司るのは混沌、無秩序、混乱、狂気です。

ブローワーは道化の女神と呼ばれています。ブローワーは女神とは言われていますが、女性であるかどうかも定かでないとも言われています。

ブローワーが人の姿で描かれる場合は、派手な服を着た若い女性として描かれることが多いです。

## 【ムー】

ムーは無を司る神です。司るのは虚無、空虚です。

ムーは世界の無の切れ端から生まれた神です。世界に生まれた神々の中でも最も古いグループの神です。また、古き神々の中では、起源が創り主ではない唯一の神です。

ムーはほとんど言葉を発することがないそうです。

世界創造においても、一言も言葉を発さず、何の意志も表明しなかったそうです。しかし、かなりの力を持っており、ムーが触れたものは完全に消滅するとされています。

ムーについてはほとんどが謎に包まれています。そもそも、そんな神など存在しないのではないかと、いう神学者もいます。

ムーは無であるため、その姿が描かれることはありません。

## 【フィニス】

フィニスは終末を司る女神です。司るのは終末、諦め、断念です。

フィニスは闇の神々の中でも最も力のある神でした。フィニスには世界を一瞬で破壊する力があり、その力は以外の神では太刀打ちできないような力でした。それゆえ、フィニスは力を行使することに慎重な一面を持ち合わせていたようです。

世界を創造する際にフィニスが、どうしても気に入らないところがあり、一度創造あきらめて、一から創造をやり直しことを提案しましたが、聞き入れられませんでした。そのため、光の勢力を争うことになりました。

フィニスが人の姿で描かれる場合は、年老いた女性として描かれることが多いです。

## 新しき祭神（魔神）

魔神は、キャラクターの科学に対する考え方、スタンス、派閥を表します。

### 【理論的帰結】

理論的帰結は、科学を探究するものの中では一般的な概念です。理論的に物事を考えて導き出された

結論は、正しいものであるという、科学の大前提になります。

### 【普遍的再現性】

科学の中でもっとも大事な要素の一つです。科学は普遍的なものでなければならないので、科学的手法が常に同じことを再現できなければ、それは科学的ではない、という考え方です。

### 【数値的解析】

科学の中の一分野、数学を用いれば、いかなる難問でも解くことができるという、考え方です。数自体が、世の中の真理であるという過激な考え方もあります。

### 【不確定性内包理論】

科学の力を持ってすら、解明することが困難なことを認めてしまう考え方です。科学は不完全なものの考え方であり、部分的にしか通用しないので、その適用する部分にだけ適用しようという考えになります。

### 【理論的排他性】

理論と理論から生まれたもの以外のものを完全に撤廃しようという考え方です。

### 【挑戦的仮説】

大胆で挑戦的な仮説を立証することが科学の中でもっとも価値あることだ、という考え方です。この魔神を信仰するキャラクターは、知識の探求を好む傾向が強いです。

### 【統計的理論】

たくさんのケースを見ることで、おのずと普遍性が導き出せるという、考え方です。

### 【絶対反証主義】

正しい理論だけで構築された理論体系でなければ、普遍的な理論は導き出せないと考え、どんな理論でも必ず疑うという、考え方です。既知の科学ですら、疑いの目を向けるため、科学者の中でも煙たがられる存在です。

### 【大統一理論】

科学者の究極の夢である、「世界の原理を説明す

るたった一つの理論」のことを大統一理論と呼びます。この魔神を信仰するキャラクターはこの理論を完成させることを目指しています。

---

## 5. 4 光と闇の対立

---

光の神々が闇の神々を撃ち払い、世界は光に包まれました。光の神々は人に秩序を与え、その秩序の範囲内での安息を約束しました。そして、光の神々を信仰する人間に世界を委ね、世界の一部となりました。

世界は神の集合体であり、神は世界そのものです。同様に、人間も世界の一部であり、神の一部の集合体です。つまり、人間は神そのものではありませんが、神の一部です。

今なお、世界には光の神々の一部と闇の神々の一部がまだ混雑しています。

たとえば、影がそうです。影は闇ではありますが、力をほとんど持たず、光を前にすると、物の後ろに隠れてしまいます。

影は素早く、捕まえることが非常に困難ですが、光を当てることで非常に簡単に消滅させることができます。しかし、光をなくすと、どこからともなくすぐに人の背後に現れます。

また、暗いという点では、夜空も同じであり、人の背後の影が本当に闇の祭神のものであるかは、見た目だけでは判別できません。一方で同じ闇であっても、夜空は人間に安眠を与えてくれます。

これから言えるのは、完全な神性は物性によって具現化されないということです。つまり、この世界に存在する物質は、すべて不完全な神の一部であり、完全な神は物体そのものではなく、その物質の本質にあるとされています。不完全であるが故、本来は不滅であるはずの神が消滅することもあります。

物質の形や性質はどの神の一部であるか、またはどの神の一部の組み合わせであるかによって決まる。

たとえば、りんごは、赤くて、こぶしよりもやや大きめの丸いものであり、食べると甘いものです。この性質は神の加護によって成立していますが、一方でこの性質を有するものが、すべてこれと同等の神の加護を得ているかどうかは分かりません。

つまり、闇の神の加護を得ていても同様の性質のものも存在します。闇の例でもあるように、五感だけで

はこれらの判断は不可能です。

これらを判別するためには、人間としての目ではなく、神としての知覚を必要とします。人間にこの知覚を得ることは不可能です。

そのため、光の神々の教義では、寵愛を受けることで、薄明かりの神々の教義では、神になることで神の知覚を得ることが必要だとしています。

---

## 5. 5 神話世界の法則

---

### フィンティア（神話的世界解釈）

聖典「始まりの書」に示された、この世界の名前である「高天郷（フィンティア）」にちなみ、神話的世界解釈のことを「フィンティア」と呼びます。ただし、この呼び方は一部の歴史学者だけにしか使われていません。

オーランは広大な高天郷の中に浮かぶ一つの島であるという解釈をされています。

このフィンティアでは、神が世界を作り、光の神々が世界に与えた秩序、法則に従いながら、世界が動いていると考えられています。人間もまた、その秩序や法則に従っています。

また、神は時として、気まぐれとも思えるように、この法則を越えるような作用を世界に与えることもあるとされています。

敬虔な信仰、真摯な人の祈りが神に届いたときに、神は神が作り出した世界の法則を超越する力を発揮するとされており、これが奇跡や祈りと呼ばれる現象です。

オーランの神や現象は、進学者の間で次のように解釈されています。

神は、単一の「神祖（ディヴァイン）」と呼ばれる要素の巨大な集合です。神が作り出したモノはそれを作り出した神の神祖を引き継いでおり、他の神祖と入り混じりながら、オーランに実際に存在するモノの形となって人間の目の前に現れるのです。

モノを構成する信組の組み合わせによって、そのモノの性質が決まると考えられています。

たとえば、りんごは主に大地の女神エルデ、実りの女神フルーレ、また明るい所にできる作物なので、わ

ずかなフォトスの加護を得ていると考えられます。

この考え方は、自然科学の中の原子論に近い考え方です。

フィンティアでは三十の神祖が提唱されており、モノの性質だけでなく、精神的、道徳的な性質も神祖により説明されています。

神祖は祭神の加護と関係が深く、ある祭神の神祖を多く持つことにより、その祭神の加護を得ることができます。

身近な現象の説明は要素的でありながら、一方で神の概念は観念的です。

たとえば、一すくい of 土を持ってしてもそれを大地の神の化身とすることはできないとされています。大地と一すくい of 土は、あくまで別物であるからです。

オーランの神学者は次のように言います。

「一すくい of 土は大地の神エルデの性質を多分に受け継いでいるが、それは大地そのものではなく、あくまで、ごく一部分にすぎない。」